

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The effective use of teachers' study meeting and the mailing list at Changchun, China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西谷, まり, NISHITANI, Mari メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001896

報告

中国長春市における教師勉強会とメーリングリストの活用

The effective use of teachers' study meeting
and the mailing list at Changchun, China

西谷 まり

NISHITANI, Mari

要旨

本稿では中国長春市における日本語教師ネットワークについて報告する。長春市では中国人教師と日本人教師が共に月例勉強会及びメーリングリストに参加し、情報交換を活発に行っている。この日本語教師ネットワークの成功の理由は(1)勉強会事務局が充実し、参加者それぞれが主体的に関与していること、(2)日本人教師だけでなく中国人教師も能動的に勉強会に参加していること、(3)メーリングリスト、ホームページといったコンピューターネットワークが効果的に利用されていることの3点に求めることができる。

キーワード：日本語教師 教師ネットワーク 勉強会 メーリングリスト

1. 長春日本語教師勉強会の立ち上げ

筆者は2000年の春から夏にかけて、文部科学省(当時文部省)から日本語教師として吉林省の省都・長春市にある東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校¹(以下、予備学校とよぶ)に派遣され、日本に国費留学する中国の大学教員を対象とした日本語教育に携わった。その際、当地において教師会の結成に参加した。帰国後は、メーリングリストを立ち上げ、現在も管理者を務めている。本稿では中国吉林省長春市における日本語教師の勉強会の活動およびメーリングリストの利用状況を報告すると共に、日本語教師ネットワークの構築の条件を考察する。

長春市の日本人教師には、日本語教育に関する知識・経験、中国へ来た動機、年齢などから大まかに分けて3つのグループがある。

第一のグループは青年海外協力隊員として、あるいは、大学や大学院の教員からの紹介で中国へやってきた若者たちで、日本語教育を大学、大学院で専攻、副専攻として学んできた、または民間の日本語教師養成講座を受講した経験のある人々である。

第二のグループは日中技能者交流センター²派遣の60代の人々が主で、日本の仕事を定年退職した後海外における日本語教育を志した人々であり、日本語教育の経験はないが、中学高校の教師の経験を有している人々である。

第三のグループは上記にあてはまらない人々である。中国語を学ぶために留学し、留学期間が終わった後も中国に残り、生活の手段として日本語教師になった人、中国人と結婚した人などさまざまである。

第一のグループの人々には日本語・日本語教育に関する知識はあっても経験が乏しく、

第二のグループの人々は教育経験・人生経験はあるが、日本語・日本語教育に関する知識は少ない。第三のグループの人々については個人差が大きい。第一、第二グループの教師の長春滞在は概ね2年間で、第三グループでは長い人になると5年を越えている。一方、中国人教師は大学または大学院の日本語または日本関係学科を修了して教職についており、大学で教えている中国人教師の日本語運用力はかなり高い。しかし、中等教育を現場とする教師の日本語運用力はあまり高くない場合もある。

2000年に中国長春市において筆者が行った調査の結果³、日本人教師たちは日本語教育の知識や経験の不足を感じていること、同じ長春市にいても日本人教師同士が日本語教育に関する情報を交換しあう場がないことがわかった。中国で日本語を教える際に難しいこととして、「勉強する機会がない」「参考図書が閲覧しにくい」ことを挙げた人が複数あったほか、「最初は余裕がなかったが、慣れてきてからは日本語教育、特に中上級に関する勉強会があったら、参加したいと思う」という意見が出された。

筆者が派遣された当時、長春市においては東北師範大学外国語学院日本語学部をはじめ、吉林大学、吉林工業大学、白恩求医科大学、長春大学、長春税務学院、吉林語言学院、長春外国語中等等、さまざまなレベルで、さまざまな目的の日本語教育が行われていた。筆者が教えていた予備学校同様、ほとんどの現場で、日本人教師と中国人教師が授業や学生について日常的に相談する場があまりなく、引き継ぎノートを作っている現場も少なかった。そのため、「中国人教師と授業の連携をとることは難しい」と感じている日本人教師が多かった。一方、中国人教師はその点について不安や不満を感じている人は少なかったが、若い教師のなかには日本語教育の理論と実践について学習の機会を求めている人たちもおり、筆者の予備学校での授業を見学しに通ってくる中国人教師も見られた。

2. 勉強会の概要

長春市で教えている日本人日本語教師のネットワークを作ること、日本人教師と中国人教師が同じテーブルについて日本語教育について語り合う場をもつことを目的として定期的な勉強会を継続的に行うことを提案したところ、賛同者が何名か現れた。そこで、長春日本語教師勉強会の第一回を2000年7月に行った。場所は予備学校の外国人教師の宿舎で、出席者は8名であった。

勉強会は2002年10月末現在19回を数えている。詳細については資料1を参照されたい。勉強会はほぼ毎月開かれ、2001年6月に勉強会の集大成とその後の勉強会への起爆剤とするべく、3日間に及ぶ日本語教師研修会を行い、約60名の参加者があった。参加者の半数以上が中国人教師で、日本人教師のなかには、大連、瀋陽、延吉等から列車で4時間～8時間かけて参加した青年海外協力隊員の姿も見られた。研修会は東北師範大学外国語学院日本語部の教室において行われた。プログラムの内容は表1に示した。

[表1：2001年長春日本語教師研修会プログラム]

日時	内容	発表者
6月15日 (金) 午後	中国の日本語教育事情 これから現場に求められる事	篠崎節子 (国際交流基金北京事務所)
6月16日 (土) 午前	ディベートを通じた 口頭表現の指導法	西谷まり (一橋大学留学生センター)
6月16日 (土) 午後	実践報告「初級の指導」 実践報告「中級の指導」 機能と進め方を重視した会話指導	関冰冰 (東北師範大学) 金英淑 (予備学校) 和栗雅子 (国際交流基金専門家)
6月16日 (日) 午前	聴解の過程を考える —聞いてわかるとは—	小林典子 (筑波大学留学生センター)

2002年6月にも丸一日を使って、拡大勉強会が行われている。参加者は中国人15人日本人17人の合計32名である。新しい試みとして、高等教育と中等教育に分かれて分科会が行われた。詳細は表2を参照されたい。

[表2：2002年長春日本語教師拡大勉強会プログラム]

<p>全大会</p> <p>東北師範大学外国語学院・桂玉植 『東北師範大学の強化教授法』 予備学校，東京外国語大学留学生日本語教育センター・坂本恵 『中国人学習者のための発音指導について』 吉林華僑外語職業学院・石河旭 『相互に添削する作文授業』</p>
<p>分科会</p> <p>中等教育分科会 2名の先生の模擬授業後，参加者で授業について話し合った。</p> <p>(1) 4技能と日事情を組み合わせた授業「私の街の暮らし」 (加藤悦子・長春市第八中学)</p> <p>(2) 中高校日本語教育と異文化理解 ～普段の授業に写真教材「であい～7人の高校生の素顔～」を取り入れる試み～ (中新井綾子・吉林省教育学院初中部)</p> <p>高等・成人教育分科会</p> <p>(1) 『私の読解授業』 (吉林華僑外語職業学院 黄彩霞)</p> <p>(2) 『コミュニケーションな授業をめざして ～東北師範大学における会話授業の実践報告～』 (東北師範大学 山田花尾里)</p>

3. メーリングリストの利用の実態

2000年9月に筆者が管理者となり長春日本語教師勉強会のメーリングリストを立ち上げた。2002年10月末までの2年間に約500通のメールが配信されている。登録しているのは66名で、日本にいる参加者が15名、中国人教師が6名、その他は中国、主に長春市において日本語教育に携わる日本人教師である。メールの内容は、新しい参加者の登録、自己紹介関係、勉強会のお知らせ報告関係が最も多く、その他に日本で行われた学会などの情報、『会話広場』⁴、クラス管理の悩み、作文添削の方法、帰国後の就職、ロールプレイの効果的方法、中国で教えるべき日本事情の内容、日本語能力試験対策、中等教育向けのテキスト作成、『自学卒業』⁵といったトピックが話し合われている。

会話広場

『会話広場』についての意見交換は以下のようなものであった。

「留学生に声をかけて『会話広場のようなもの』をやってみようかと思い始めました。全く初めてのことなので、何から始めていいのかわかりません。そこで、『会話広場』をされている先生方がいらっしゃったら、いろいろと聞かせていただけたらと思います」

という問いかけに対して、実際に『会話広場』を行っている参加者から、歌を使ったクイズなど、実践的な仕掛けについて情報提供がなされた。『会話広場』の運営方法、使う素材について経験やアイデアが披露され、例えば、

「今日は会話広場で、『この後どうなる？クイズ』というのをやってみました。VCDを学生に見てもらい、途中で画像を止め、『さて、この後この人は何をするでしょうか』『この後どうなるでしょうか』などと質問し、予想・想像してもらって、当ててもらうクイズです。必要に応じて、問題や正解を黒板に書きました」

といった発言があった。

クラス管理

ある時は、クラス管理についての悩みが語られた。

「私が今一番困っているのは、小学生が大騒ぎになってしまった時の対処の仕方です。授業中に突然喧嘩が始まったり、ゲーム中に別のチームを罵りあったり、65人もいるので、いつもどこかで何か問題が起こってしまいます。相手は小学生ですから、ある程度は仕方ないとしても、授業が成り立たなくなるとは困るので、叱らなくてはと思うのですが、ど

う叱ったらよいのかわからず、途方にくれてしまうこともしばしばです。残念ながら、授業が続けられない状態に陥ることもあります。そんな時、私は一体、どう対応したらいいのでしょうか」

という問いかけに対して、高校教師歴数十年の参加者から、

「教師というのは、何回も試され、試行錯誤して、前進するものです。最初からそんなに上手く行くものではありません。しかも、異国に来てですから、さらに大変です。やはり原則に帰り、焦らずにやるべき事をやることです。生徒に迎合しないこと、きちんとすることは言い、言ったことは貫き通すことです。そして、厳しい面の反面、やさしく包んでやるのが大切です。教育の原点は、優しさと厳しさです。また、影響のある子どもとのコミュニケーションです。何気ないことから言葉を交わし真意を伝え、真意を聞くことです。及び腰、逃げ腰の態度をとると真面目にやろうとする生徒をも遠ざけることとなります。また、生徒のレベルをどこに置いて授業を進めるかも重要です。高い方も低い方もかなうようなレベル、気の配り方が必要です。そして、面と向かってどうして授業中騒ぐのかも全体に迫ってみることも必要です。手をかえ品をかえいろいろ試みるのではなく、迎合、妥協することなく、理にかなったことをすすめることです」

という助言が寄せられた。それに対して、

「おっしゃるとおり、初めからうまくいくはずありませんよね。よく考えてみたら、まだ4ヶ月しか経っていませんし、これまで高校生以下の子どもたちを教えたこともなく、ましてや相手が中国人ともなれば、大変なのは当たり前でした。そう思ったら、気持ちが楽になったような気がします」

と、相談者が応答している。クラスコントロールに悩む若い教師に対する、学校現場の経験豊富な元高校教師の心のこもった、そして実践に裏付けられたアドバイスと、それを真摯に受け止めて前に向かっていく若い教師のやりとりであった。

作文添削

また作文添削のあり方については、

「作文を一生懸命添削して赤を入れてもそのままゴミ箱にいつってしまうケースが多いということについてどう考えるか」

と筆者が提起した問題に関して7人が参加して、活発な議論が行われた。そして、ある参加者からは、

「今年は、生徒の能力以上の添削はしないという方針でやっています。これは、添削し過ぎてしまった昨年の反省からです。今のところ人数がそれほど多くないので、各作文の誤用に○や？を付け、生徒に自分で直させています。作文が上手な生徒は添削をよく見ているようで、あとで質問に来たこともありました。このように自分の間違いをモニターできれば上達するのかもしれませんが」

というメールが配信された。「5点刻みで点数をつけて合格点に満たない生徒だけ書き直させる」「優良作文と自分の作文を比較させて、その文型をまねして書かせる」といった指導法、「学生による集団添削⁹⁾」の方法などが詳しく語られた。

帰国後の就職

日本帰国後の就職についても何通かのメールが往復した。帰国後日本語教育機関に就職している20代、30代の先輩から、

「卒業と同時に中国に行き、帰国後すぐに日本語学校で働いているわけですが、授業に関しては、中国での教え方では全然だめだなと実感しています。教育機関によって望まれる教え方も違うわけですから、当然のことなのかもしれませんが、中国で求められていた授業のやり方と全然違います。日本語の授業に関しては全然うまくできないことばかりですが、校内では中国人学習者の学習態度について非常に問題になっているので、多少持っている中国の知識や中国人の学習環境などの話が役に立っているように思います」

「日本で仕事を続けようと考えている方は、やはり、海外でも甘えることなく、スキルアップに努めることや日本社会の常識について認識することは必要だと思います。ただ、私の経験から言うと、中国で2年間教授経験があるということはかなり重宝がられます。特に、中国語ができることや中国の事情に詳しいことは1つの武器になるでしょう。もし、状況が許すようでしたら中国語と日本語の対照研究を中日の先生方で協力してやってみて、論文などの形にしておけば、確実に評価してもらえそうです。何であれ『これをやった』と情熱をアピールできるものがあればいいのでは。それから、日本語教育の経験も大事ですが、中国の長春という場所に住んで、いろんな人に会って視野が広がったことも、私にとっての宝物だと思っています」

という体験談が語られている。また、教師教育に携わった参加者からは、

「今だけでなく、1年後、3年後を見通して、自分のテーマを決め、時間をかけて、研究、報告、教材づくりなどをなさってください。海外にいと、残念ながら、新しい情報に疎くなってしまうということもあると思います。今は、インターネットで資料を入手できる時代ですから、ぜひ、外国語教育の最新の情報に触れてください。その一方、毎日の現場での貴重なデータを集めておき、何年かしたら、何かまとめてください」

というアドバイスがよせられている。

メーリングリストは授業その他で困ったことをお互いに相談し、経験者がそれに助言する場、勉強会の情報提供、勉強会後に発表について感想を話し合う場になっていることが窺える。日本語教育についての知識や経験を共有するだけでなく、年長者、教育現場の経験者から人生経験、教師経験を語ってもらうことは若い教師にとっては大きな力になるだろう。「明日から断水なので水の汲み置きがまだの方は早速とりかかってください」「私の住居では今日から暖房が入りました」といった貴重な生活情報や、「昨日降った雨は人工雨なのか!？」といった話題もやりとりされている。2001年夏には長春市に滞在中の日本人教師の手によってホームページが開設され⁷、勉強会の報告、授業の役に立つリンクなど豊富な情報が提供されるようになった。

勉強会、メーリングリストの意義について、参加者の一人が以下のように語っている。

「教師というのは、悪く言えば、教室のお山の大将になりがちな危険性がある。みなそれぞれに試行錯誤を重ね、よりよき授業を模索していても、時にはそれが独走であったりして問題点に気づかなかつたり、あるいは気付いたとしてもどうすればよいのか分からなかったり。また、授業を担当するにあたって、自分の知識不足や経験不足から生じる問題に悩むことも少なくない。でも、これは一朝一夕に何とかなるものではなく、また一人で悩んでいるだけでも埒はあかない。日本ならば、職場の上司に相談するとか、同僚と話し合うことも可能であろうが、場所が外国であるがために、それがどこの学校でも可能とは限らない。そうした状況の下、やはり同じような悩みを抱えている人や、同じような仕事をしていても、自分とはまた異なる経験をもっている人との交流が求められるのではないだろうか」

メーリングリストの利用をさらに活性化するためには、管理者を含めたキーパーソンがホットな話題を提供し、新しい情報を発信していくことが必要であるが、それだけではうまくいかない。参加者それぞれが自分たちの悩みを率直に発言し、他の参加者がそれを自らの問題として共に考え、解決していこうという雰囲気づくりが大切である。そのためには定期的に参加者のリストを公開し、どのような人々が参加しているかについての情報を

共有することも必要になってくるだろう。

4. 教師ネットワークの形成の要因

国際交流基金日本語国際センター（2001）によれば、中国でも3年前までは教師会といえ、全国レベルの中国日語教学研究会しかなかったが、現在では各省、各市地方レベルの教師会も出来てきているということである。中国東北部について言えば、長春市ほど活発ではないようであるが、大連、瀋陽でも教師会が活動している。長春日本語教師ネットワークの成功の理由は

- (1) 勉強会事務局が充実し、参加者それぞれが主体的に関与していること、
- (2) 日本人教師だけでなく中国人教師が能動的に勉強会に参加していること、
- (3) コンピューターネットワークが効果的に利用されていること、

の3点に求めることができる。

事務局については、2000年に筆者が教師勉強会の結成を呼びかけたときに集った参加者のなかから、所属機関の異なる数名が事務局となり、勉強会のお知らせ、会場の確保、議事録の公開（メーリングリストおよびホームページ上で）を行ってきた。さらに、教師会発足1年後には、全ての参加者に能動的参加を求めるルールづくりが行われている。「会費は一人5元とする」という会費制の制定とともに、「勉強会参加者間で自由に貸し借り可能な教材・及び参考書リスト作り」「学習者が誤りやすい類似表現の教え方について1. 話し合いが行われる前の月までに、テーマに沿った文献を探してきてコピーして参加者に配布する。（事務局が中心となっていく）2. 参加者は次の月までにその資料を各自読んで、勉強してくる。3. 翌月に、各自読んできた文献を参考にし、それから一歩進めてその文法項目のよりよい教え方について、みんなで話し合う」という取り決めを行っている。長春市で日本語を教えている日本人教師の大半はおおよそ2年で入れ替わっていくが、継続的に青年海外協力隊員が派遣されていることも事務局の継続という意味で大きな意味を果たしている。

次に、「中国人教師の能動的参加」とはどのようなものだろうか。長春日本語教師勉強会には、常時数名の中国人教師の参加があり、発表も行っている。2001年6月の日本語教師研修会の事務局には中国人教師数名が積極的に参加し、2人の発表者が中国人教師であった。参加者のうち半数以上が中国人教師であった。2002年6月の拡大勉強会の参加者も日本人、中国人がほぼ同数で、中国人教師2人が発表を行っている。中国人教師と日本人教師が同じテーブルについて共に学びあう場があることは双方にとってメリットが大きい。現在長春日本語教師勉強会で継続課題としている「類義語の教え方」については、中国語母語話者の参加を得て、中国語との対照を含めて実践的な議論が行われているようである。

「コンピューターネットワークの効果的な利用」とはメーリングリスト、ホームページの活用である。メーリングリストは閉じたパーソナルネットワークであるため、先に述べ

たように個人の体験を開示することもあり、かなりつつこんだ議論が可能になっている。また、日本で行われた新しい研究会の情報、求人情報なども提供されている。海外で教えている若い日本語教師の悩みの1つは帰国後の就職である。「帰国後も日本語教育に携わりたい気持ちはあるが、それが可能かどうかわからない」と不安を口にする人も多い。メーリングリストにおいて帰国後、日本語学校や大学に職を得て活躍している先輩の生の声を聞くことができること、就職のために中国滞在中にしておくべきことについてアドバイスが受けられることは大きなメリットである。また、ホームページで常に情報を公開し続けることによって、勉強会の欠席者も発表内容を知ることができるだけでなく、全世界で教えている日本語教師に有益な情報を提供している。

5. ネットワークのさらなる発展に向けて

第19回勉強会では、参加者の教えている学校・学習者等にかかなりの相違があり、問題意識を共有化できないことが議論されている。その後、事務局で対応策が話し合われた結果、発表者の現状説明に終わらず、何かフィードバックできるようにしたいということで、「発表者は問題意識を明確にし、発表内容は具体的・わかり易いものにする」「聞き手に授業の様子がわかる模擬授業などの方法を取り、悩み・問題を明確化すること」が提案されている。

長春市の日本語教師ネットワークは、実際の授業に役立つ実践の共有、同じ地域で日本語教育に携わる日中日本語教師の顔の見えるコミュニケーションに大いに役立っている。しかし、それだけにとどまらず、当該国及び当該地域にふさわしい日本語の教育研究を進め、その経験を蓄積していくことも重要な課題である。

第4回勉強会で「中国における日本語教育の歴史的発展」について発表した参加者は、

「現在の日本語教育研究状況を鑑みると中国語圏の学習者を念頭においた教授法はまだ確立されていない。中国国内の日本語教育の状況も多様化しており、不十分である。中国で日本語教育に携わっている教師たちが、中国における日本語教育という視点から自らの教室活動を一つの基盤として、各分野の日本語教授法を確立する模索が望まれる」

と語っている。

今後の教師ネットワークのあり方を考えた場合、やはり中心となるのは対面コミュニケーションの場である定例勉強会であるが、補助的手段としてインターネットは大いに利用できる。勉強会を主体としつつ、メーリングリスト、ホームページといった時空を越えたメディアを補助手段として利用することによって、これまで共有できなかった情報、継承しにくかった知識が蓄えられはじめている。世界各地に点在している日本語教師がそれぞれ地域的ネットワークを形成し、その国、地域にふさわしい日本語の教育研究を進め、そ

の経験を蓄積していくことが望まれる。

注

- 1 予備学校は中国教育部と日本の文部科学省、国際交流基金によるジョイント・プログラムであり、2002年度で23年目を迎えた歴史ある日本語教育機関である。筆者は2000年3月末からの約5ヶ月間、同学校に派遣され、日本語教育に携わった。東京外国語大学留学生日本語教育センターが日本語教育の、東京工業大学が専門教育の基幹校となっており、毎年、日本語教育の専門家及び、理工系を主とした専門科目教官が派遣されている。予備学校の主な対象者は日本に国費留学する中国の現職大学教員であるが、そのほかに新疆ウイグル自治区の学生だけを対象としたクラス、私費で日本留学を目指す学生のクラスもある。すべてのクラスで集中日本語教育を行っている。東北師範大学外国語学院日本語学部は日本語を主専攻として学ぶ正規学生を対象としており、別組織になっている。
- 2 日中技能者交流センターは、1986年、日中両国の友好と経済協力を推進するため、労働団体、経済団体、福祉団体などの協力によって設立された財団法人である。応募資格は65才未満で、健康であり「国語もしくは外国語（英語など）の教師資格を有し中学・高校・大学等で10年以上の教職経験をもつ者」または「日本語教育教師資格を有する者または日本語教師養成研修を修了した者で、いずれも3年以上の日本語教育の教職経験をもつ者」とされている。ボランティアだが、中国国家外国専門家局との協定で、一月当たり1,100元以上の生活手当と一年間の勤務につき同じく1,100元の休暇手当が支給される。常時100名程度が中国で教鞭をとっている。（<http://www.jcsec.or.jp/>）
- 3 調査対象者は2000年に中国吉林省長春市で日本語を教えていた日本人教師10名、中国人教師5名である。その他の地域で教えている日本語教師にも意見を聞くために、中国の内モンゴ、ベトナム、マレーシア、アメリカ、フランスで日本語教育経験がある日本人教師9名にも調査票を送った。調査対象者は合計24名である。長春市以外の対象者にはe-mailで調査票を送って回答してもらったが、長春市の教師に対しては、調査票に答えてもらった後で、面会して1時間～2時間程度のインタビューを行った。この調査内容と結果は西谷（2001）に詳述してある。
- 4 『会話広場』とは、授業時間外に学生たちが集まって自由に会話を楽しむサークル活動のこと。
- 5 『自学卒業』とは、中国教育部が正規に認めている高等教育制度で、大学に進学しなかった社会人等を対象に、自分の決めた専攻について1科目ずつ試験を受けて、すべての科目に合格すれば、大学本科（学部）卒業と同等の資格を認定するというもの。高等教育機関が少なく、大学に進学するのが困難だった時代に創設された制度である。自学卒業者に日本の大学院出願資格を認めるかどうかという問題が日本のメーリングリスト参加者から提起され情報提供が行われた。

6 学生28人を3班に分けて集団（公開）添削を行う。学生同士で討論，指摘しながら添削する。お互いの文をみることによって良いところを「公然と盗みあう」ことができ，何人かの作文を集団添削しているうちに，自分の不足しているところ，問題点が見える相乗効果もある。仲間からの指摘に素直に耳を傾け，みんなが一緒に合格しようとする相互援助の姿勢も育つ。この指導法を公開した元高校教師は，この方法は日本の進学高校の小論文指導からヒントを得たが，実際に中国人学習者にも効果があったと述べている。

7 ホームページ <http://changchun.fc2web.com/>

参考文献

伊勢田涼子（1997）『海外で教える日本人日本語教師養成についての基礎的研究』平成8年度科学研究費補助金研究成果報告書。

国際交流基金日本語国際センター（2001）『国境を越える日本語教育—地球規模でのネットワーク作りをめざして—』国際交流基金日本語国際センター。

長春市日本語教師勉強会（2001）『2001年長春市日本語教師研修会報告書』長春市日本語教師勉強会。

西谷まり（2001）「海外における日本語教師ネットワーク—勉強会とMailing Listの効果的な活用—」『一橋大学留学生センター紀要』5号,77-92.

資料：長春市日本語教師勉強会の歩み

年月日	出席者	発表者，所属，内容
第1回 2000年 7月1日	8名 日本人8名	西谷まり（予備学校）練習の方法
第2回 8月27日	10名 日本人6名 中国人4名	石河旭（東北師範大学）作文指導 西谷まり（予備学校）ディベート指導
第3回 10月15日	17名 日本人14名 中国人3名	宋欣（吉林工業大学）日本語音声文法の構想 田賀真美子（白求恩医科大学）能力試験1級対策授業
第4回 11月12日	20名 日本人19名 中国人1名	山田花尾里（東北師範大学） 中国における日本語教育の歴史的発展 東和枝（予備学校） 日本事情の授業実践—難しすぎる教科書をいかに使うか

第5回 12月10日	14名 日本人11名 中国人3名	常驕陽（長春市大学） 景気低迷のもとにある灰色現象と金ブーム 小林由生（長春市第一外国語中学） 小中学校における日本語教育
第6回 2001年 3月11日	15名 日本人14名 中国人1名	木下崇（吉林大学）学生の作文指導・学生との知恵比べ 西田孝（長春市師範学院）日本語教授法の陥穽
第7回 4月8日	10名 日本人9名 中国人1名	芝村康子（吉林大学）初級後半の会話授業実践報告 松崎りえ（予備学校） 短期集中コースにおける初級の会話練習
第8回 5月27日	10名 日本人9名 中国人1名	浜野なな枝（長春市外国語学校） 実践報告「スピーチコンテストの指導」 東海林健（予備学校）中級視聴覚の授業実践
第9回 8月26日	22名 日本人16名 中国人6名	今後の方針について討議。
第10回 9月16日	18名 日本人14名 中国人4名	澤田智穂子（長春市十一高校） 授業実践報告「問題点の発見と明確化」 山田花尾里（東北師範大学） 類義表現の教え方 テーマ「ね・よ・よね」
第11回 10月14日	20名 日本人15名 中国人5名	呉尽（華僑外国語学院） 授業実践報告「二年生の日本語文法授業」 山田花尾里（東北師範大学） 類義表現の教え方 「ね・よ・よね」 (前回の続き)
第12回 11月11日	21名 日本人16名 中国人5名	松崎りえ（予備学校） 授業実践報告「テープを使用した初級視聴覚授業」 劉麗華（吉林大学） 類義表現の教え方「うれしい」「楽しい」
第13回 12月9日	16名 日本人13名 中国人3名	加藤悦子（第八高校） 授業実践報告「聴解・作文授業におけるクラス活動」 孫淑平（華橋学院） 類義表現の教え方「大変」「とても」「非常に」
第14回 3月10日	14名 日本人12名 中国人2名	小林由生（第一外国語学校） ロールプレイを用いた授業の実践報告 濱野なな枝（外国語学校） 類義表現「ぜひ」「きっと」「必ず」

第15回 4月14日	17名 日本人13名 中国人4名	辻聖子（朝鮮族中学） 高校教科書「日語」の会話部分を使った授業 呉尽（華僑外国語学院） 類義表現「そこで・それで・だから」
第16回 5月12日	16名 日本人15名 中国人1名	光永勝郎（長春市税務学院国際経済系経貿日語科） 日本経済概況を日本語で教える授業の実践報告 魚住供子（予備学校） 類義表現「に対して、について、にとって」
第17回 6月22日 拡大勉強会	32人 中国人15人 日本人17人	東北師範大学・桂玉植『東北師範大学の強化教授法』 予備学校，東京外国語大学留学生日本語教育センター・坂本恵 『中国人学習者のための発音指導について』 吉林華僑外語職業学院・石河旭 『相互に添削する作文授業』 分科会—高等・成人教育分科会と中等教育分科会
第18回 9月15日	17人 中国人3人 日本人14人	自己紹介・今年度一回目の授業で何をしたか等 澤田智穂子（長春市第十一中学） 実践報告「大学入学試験対策の作文の授業」
第19回 10月13日	18人 中国人3人 日本人15人	滝沢宜子（華僑外語学院）実践報告①「平凡な会話の授業の中で」 長田佳奈子（予備学校） 実践報告②「コンピューターを利用した試験結果処理」

注：所属に記載した予備学校は東北師範大学赴日本国予備学校，東北師範大学は東北師範大学外国語学院日本語学部を指す。

注記：本稿において採録したメーリングリストのやりとりについては，発言者たちの掲載許可を得ております。